



マルグリット・ド・ヴァロワの恋愛書簡を読む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006059

マルグリット・ド・ヴァロワの恋愛書簡を読む

鍛 治 義 弘

I 初めに

16世紀後半から17世紀初期にかけて生きたマルグリット・ド・ヴァロワの残した『回想録』を私たちは前回検討したが、そこでナヴァール王妃は自らの生涯を回顧して綴りながら、自分の恋についてはほとんど触れず、一般に愛人であったと見なされているアントラーグやビュッシーとの関係も巧妙にぼかしていた。19世紀のスタンダールやとりわけデュマの描き出すマルグリットを待つまでもなく、17世紀、さらには16世紀においても、この王女は恋多き女性として知られていた。自身の恋についてマルグリット自身の著したものとしては、シャンヴァロンに宛てた書簡が現存しており、この恋文を読むことで、この女性の恋愛関係の一端が明らかになる。

II シャンヴァロンとの関係

まずは恋の相手であるシャンヴァロンとはいかなる人物であったのかをみよう。16世紀の人々にも当代随一の美男として知られていたようではあるが、現在のマルグリット関係の研究書などでは詳しいことは書かれていない。幸いにモレリの『歴史大辞典』にかなりまとまった記述¹⁾があるので、それに基づいてプロフィールを述べよう。

シャンヴァロン領主ジャック・ド・アルレはルイ・ド・アルレ（～1581.6.10）とルイズ・ド・カールの第三子であり、生年はモレリには記載されていないが、マリエジョルは1550年頃と推定している²⁾。マルグリットの弟のアランソン公の傍らで育てられ、アランソン公の主馬頭、親衛隊長、軽騎兵隊隊長などに任ぜられ、マリエジョルが述べるように、アランソン公のネーデルラント戦にも同行している。サンスの地方総督を経て、アランソン公没後、混乱の時代には旧教徒のリーグ派につき、砲兵隊隊長となるが、その後アンリ四世に従い、1602年にはサン・テスプリ騎士団団員となり、ロレーヌ公の侍従、ロレーヌ公のフランスにおける管理官となる。1630年4月3日に死亡した。1582年フランス元帥のブイヨン公爵ロベール四世の末娘カトリーヌ・ド・ラ・マルク（1548年の生まれ）と結婚し、少なくともアシル（～1657.11.3）とフランソワ（サン・ヴィクトール大僧院長、ルーアン大司教 ～1653.3.22）の二子を設けている。

¹⁾ Louis Moréri, *Le grand dictionnaire historique ou Le mélange curieux de l'histoire sacrée*, Brunel, 1740, vol.4, p.37 et p.38.

²⁾ Jean-H. Mariéjol, *La vie de Marguerite de Valois reine de Navarre et de France (1553-1615)*, 1928 (Slatkine reprints, 1970), p.169.

名門とまではいかないのであろうが、かなり立派な帯剣貴族の家系の三男として、混乱の時代をかなりたくみに生き延び、相当の地位を手に入れた、なかなかしたたかな男であった印象を受ける。先ほども述べたように同時代人には美男として通っていたが、文人としての面も持っていた可能性もあり、レトワールが掲げるマルグリットのスタンスは、シャンヴァロン側から贈られたものであろう³⁾。

マルグリットはシャンヴァロンをアランソン公の近習として既に知ってはいたが、恋の始まりは1580年のことである。当時第七次宗教戦争で対立していたフランス王権とアンリ・ド・ナヴァールを仲裁するためにアランソン公が南仏にやって来て、11月26日にフレクスの和議が成立したが、同行したシャンヴァロンとマルグリットは激しい恋に陥った。マルグリットとシャンヴァロンの恋は隠しようもないほどだったようで、当時の記録にも登場するが、恋の始まりを証言するのは、後にマルグリットを激しく攻撃するアグリッパ・ドービニエである。このプロテスタントの武将詩人は『世界史』で「ナヴァール王妃がカディヤックでシャンヴァロンとなれなれしくしているのを発見された」⁴⁾と述べている。その後シャンヴァロンはアランソン公に従いフランドルの戦に赴くが、二人は手紙のやり取りを続け、マルグリットが1582年5月パリに戻り、1583年8月パリを出立するまで、恋愛は続いた。

恋の終わりはヨーロッパ中に広まるほどのスキャンダルを引き起こしたが、その様子をレトワールの日記やブスベックの神聖ローマ皇帝宛の書簡で知ることができる⁵⁾。二人の証言をまとめれば次のようになる。マルグリットの兄フランス王アンリ三世は、宮廷中の者の前で、マルグリットの愛人の名を挙げ、侮辱し、パリからの出立を命じる。マルグリットは8月8日パリを出立するが、バレゾーとサン=クレールの道中で王の差し向けた兵により一行は搜索を受け、侍女のデュラス夫人とベチューヌは拘束された。その他秘書、医者ら10人が逮捕され、モンタルジに連行され、マルグリットの不品行や、宮廷に戻ってからもうけたと噂のあった子どもに関して、王自ら尋問した。この間にシャンヴァロンはドイツに逃れた。しかし王は逮捕した者たちからマルグリットの出産の確証を得ることができず、マルグリットは南仏の夫のもとへの旅を続けるが、王妃へのこうした侮辱はフランスとナヴァール間の外交問題となり、アンリ・ド・ナヴァールは妻を受け入れることを拒み、マルグリットはしばらくあてもなくさまよう破目に陥った。

アンリ三世がマルグリットをこうした窮地に追いやったのは、フィレンツェ大使がマルグリ

³⁾ Pierre de l'Estoile, *Mémoires-journaux*, Tome XI, Librairie des Bibliophiles, 1883, pp.157-160. ただマリエジョルはこのスタンスをパンジャマン・ジャマンの作ではないかと推測している。Op.cit., p.172.

⁴⁾ Théodore Agrippa d'Aubigné, *Histoire universelle*, Commelin, 1626, col.1078; édition de De Ruble, T.VI, p.159. <<La Roine de Navarre ayant esté découverte à Cadillac en ses privautéz avec Champ-vallon>>.

⁵⁾ Pierre de l'Estoile, *Mémoires-journaux*, Tome II, Librairie des Bibliophiles, 1875, pp.130-132. LETTRE DE BARON DE BUSBEC A L'EMPEREUR RODOLPHE II, in *Mémoires et autres écrits de Marguerite de Valois la reine Margot*, Édition présentée et annotée par Yves Cazaux, Mercure de France, 1986, pp.329-330.

ットの妊娠説を書く⁶⁾ほど、シャンヴァロンとの関係が世間に広まっていたせいとも考えられるが、ヴィエノはアランソン公のフランドルでの戦に関して、マルグリットに手を引かせるためであるという、政治的理由も指摘している⁷⁾。

Ⅲ 恋愛書簡の時間的位置づけと書簡から見える恋愛の展開

このような証言が残っているマルグリットとシャンヴァロンの恋愛は、二人の間の書簡によっても裏付けられる。しかし今日アルスナル図書館のコンラール写本に残されている、マルグリットがシャンヴァロンに宛てた18通とシャンヴァロンからの2通の手紙は、いずれも日付も発信地もない。そのため二人の関係がどのように進展したかを把握するのはまことに困難である。幸いにもマルグリットの最新の書簡集⁸⁾を刊行したヴィエノは、各書簡の日付と発信地を推測して、書簡番号とともに記載しているので、まずはこの推測とこれまでの証言ならびに、上に引いたマリエジョル、ヴィエノとガリソン⁹⁾による、マルグリットの信頼にたる代表的な伝記によって、これらの書簡と二人に起きた出来事を一覧にしてみよう。(〔 〕はヴィエノの推定している手紙の日付である。)

1578.2.14 アランソン公ルーヴルより脱出アンジェへ向う シャンヴァロン同行 (レトワール、T. I, p.235)

1578.7.7 アランソン公フランドルに向う シャンヴァロン同行 (レトワール、T. I, p.258)

1580.1.1 フレクスの和議 マルグリット シャンヴァロンと再び会う (マリエジョル、p.169)

1580.1.2 アランソン公一行 クトラで過ごす マルグリットとシャンヴァロン愛人関係に (マリエジョル、p.170; ヴィエノ、p.176)

1580.1.2.24-1581.3.15 アランソン公とマルグリット カディヤックに滞在 (マリエジョル、p.170; ドービニエ、『世界史』)

1581.4末 アランソン公フランスへ出発 シャンヴァロン同行(ヴィエノ、p.177; マリエジョル、p.171; ガリソン、p.205)

[1581.5] 書簡110

1581.6 ナヴァール王 フォスーズと温泉に マルグリット バニェール=ド=ピゴールで不妊治療(ヴィエノ、p.178)

⁶⁾ Mariéjol, *op.cit.*, p.200.

⁷⁾ Éliane Viennot, *Marguerite de Valois Histoire d'une femme histoire d'un mythe*, Payot, ©1993, p.152. Cf. Janine Garrisson, *Marguerite de Valois*, Fayard, ©1994, p.201.

⁸⁾ Marguerite de Valois, *Correspondance 1569-1614*, Édition critique établie par Éliane Viennot, Honoré Champion, 1998. なお本論文でのマルグリットおよびシャンヴァロンの書簡への言及、引用はすべてこの版により、書簡番号と頁数を記す。

⁹⁾ Janine Garrisson, *op.cit.*

- 6.8-26 バニエール＝ド＝ピゴール滞在 (マリエジヨル、p.180)
- [1581.6 中旬] 書簡115
フォッスーズの死産
- [1581.7] 書簡117
- 1581.8.18 アランソン公カンブレー奪取 (ヴィエノ、『書簡集』p.184, n.1)
- 1581.9 アランソン公カトレに退却 イギリスに渡る (マリエジヨル、p.185)
- [1581.9 初め] 書簡124
- 1582.1.29 マルグリット ネラック出立 (マリエジヨル、p.182)
- 1582.3.8 マルグリット フランス宮廷に戻る (レトワール、T. II, p.59)
- 1582.3.21-27 モト＝サン＝エレでアンリ・ド・ナヴァール、マルグリット、カトリーヌ会見 (マリエジヨル、p.182)
- [1582.3-5] 書簡155
- 1582.4.28 マルグリット フォンテーヌブロー到着 アンリ三世の出迎え (マリエジヨル、p.188)
- 1582.5.28 マルグリット パリに戻る (ガリソン、p.186)
- [1582.8] 書簡158
- [1582.8] 書簡159
- [1582 夏] 書簡159bis (シャンヴァロンより)
- 1582.8.20 シャンヴァロン カトリーヌ・ド・ラ・マルクと結婚
- [1582.8 末] 書簡161
- 1582.11.14 シャンヴァロン パリを出立(ヴィエノ、『書簡集』 p.232, n.1)
- 1582.8.27 マルグリット 購入したピラーグ国璽尚書旧宅に定住 (ヴィエノ、『書簡集』、p.231, n.1)
- [1583 冬] 書簡162
- [1583 冬] 書簡163
- [1583 冬] 書簡164
- [1583.2.21] 書簡167
- [1583 春] 書簡170
- [1583 春] 書簡171
- [1583 春] 書簡172
- [1583.4] 書簡173
- [1583.4 末] 書簡173bis (シャンヴァロンより)
- [1583.5-6] 書簡174
- [1583.5-7] 書簡175
- 1583.6.27 フィレンツェ大使 マルグリットが太り、妊娠説、水腫説があると書く (マリエジヨル、p.200)

- 1583.8.7 アンリ三世 マルグリットにバリを出立するよう命令 シャンヴァロンの宿を捜索させる (マリエジョル、p.205)
- 1583.8.8 マルグリット フランス宮廷を去る (レトワール、T. II. pp.130-132)
- 1583.8.9 アンリ三世、パレゾーとサン=クレールの間でマルグリットの一行を停止させ、捜索、供の何人かを逮捕、拘束 (マリエジョル、p.205-206; レトワール; ブスベック)

配置に基づく恋愛の展開

マルグリットとシャンヴァロンの中で交わされた手紙は現存しているもの以外にもあったであろうし、また今後の調査により手紙の日付、発信地の推定はさらに正確になる可能性もある。そうした研究の進展を待つ間、このような恋愛書簡の配置を受け入れざるをえない。この配置からは、二人の恋の進展は以下のような経過をたどったと思われる。

1580年末に始まった二人の仲は、1581年4月のシャンヴァロンのフランドルへの出立によって身体的には引き裂かれる。同年6月には、マルグリットは、『回想録』で書くように、フォスーズがナヴァール王の子を身ごもったために、ナヴァール王にフォスーズとともにオー・ショードに赴くことを要求されるが、ようやくこの要求を退け、王たちがこの温泉に行く間は、自らはバニェール=ド=ビゴールに滞在する。この折に書かれた書簡115については、後に詳しく検討するが、この非常に辛い精神的危機のときにあつて、シャンヴァロンとの恋は王妃にとって不幸の中の唯一の希望であつた。また書簡124では戦の知らせを誰よりも待ちわびて、戦場にあるシャンヴァロンの身を案じている。

この恋に転機、危機が訪れたのはシャンヴァロンの結婚問題が原因であろう。書簡117で書いているように、マルグリットは自らの近くに侍女としておいて恋人とより頻繁に会えるという自分たちの都合のためにも、シャンヴァロンの妻をみずから探し、以前の候補者よりもより有利な、年金をより多くも持ち、二人しか子供のいない、より美しく、より優しく、貞淑で、上手にイタリア語を話す女性を世話しようとしている。ところが恐らくシャンヴァロン自身が自ら結婚活動に乗り出したのであろう、書簡155ではマルグリットは三ヶ月前からの関係の冷却を嘆く。もっとも自分で身を立てねばならない貴族の三男が、年上だとしても名門貴族の娘をむしろ望むのは当然であろう。書簡158で表明されていた恋人の不実の疑いは、間もなく明らかとなる。シャンヴァロン自身の意思による結婚はマルグリットの耳にも入り、書簡159ではナヴァール王妃は恋人の裏切り、騙しに憤り、フランス王女らしく、相手を「軽蔑」<< *dédain* >> (p.228) することで乗り切ろうとする。しかしシャンヴァロンからの、翌日会い、釈明したいとの書簡159 bisにより、関係は修復された。

ヴィエノが1583年冬から春にかけて位置づけている書簡162～172の時期は二人の関係は安定し、これらの恋文ではマルグリットはシャンヴァロンに自らの信奉するネオプラトニズムの愛の哲学を説いている。書簡167で述べられるように、結婚が「生涯で唯一の禍」

<<le seul fléau de ma vie>>(p.239)であるのだから、そしてまた特に王侯貴族にとって結婚は子孫を残すための制度であるのだから、愛は結婚制度の外にむしろあり、その理屈、理論化をマルグリットはネオプラトニズムに頼ったと見られるが、この点は後に詳しく検討しよう。ただシャンヴァロンを「魂が俗な愛で堕落している」<<votre âme corrompue des vulgaires amours>>(書簡170、p.244)と非難しても、「肉体の淫蕩な欲望」<<vicieux appétits de votre corps>>(書簡170、p.244)と闘わなくてはならないとしても、恋人は「素晴らしい思いへの情熱の因果の観想」<<la contemplation des causes et des effets de leurs (=de belles pensées) passions>>(書簡172、p.247)には退屈し始めるだろう。

こうして恋人たちの間に綻びが見え始めた頃、外部に障害も発生する。「呪われた地獄の人種」<<racés maudites et infernales>>(書簡173、p.249)「この下界で悪意ある人がこの不快を企んだ」<<ici bas quelque âme malicieux ... a tramé ce déplaisir>>(書簡173、pp.248-249)とは、宮廷を初めとして、1583年6月末にフィレンツェ大使が報告するに至るような、二人を取り巻く人々からさまざまな噂が出て、中傷攻撃もなされたことをいうのであろう。降りかかる不幸はシャンヴァロンの身に及んだようで、シャンヴァロンは「起こったいざこざ」<<une brouillerie qui s'est passée>>(書簡173bis、p.250)をマルグリットには話さないとするが、マルグリットは「あなたを危険に曝す」<<vous mettre en danger>>(書簡174、p.252)のではないかと不安に思い、写しを取るのを忘れるほど乱れた手紙<<lettre brouillé>>(書簡174、p.252)<<letter...embrouillée>>(書簡175、p.254)の中で、シャンヴァロンに全てを委ね、「魂、心、命はあなたの意のまま」<<mon âme, mon cœur et ma vie sont en votre disposition>>(書簡175、p.253)とまで述べ、自分は「愛の本当の殉教者」<<vraie martyre d'amour>>(書簡175、p.254)として、シャンヴァロンの栄光を歌うという。しかし兄アンリ三世の不興を買い、先に述べたように、スキャンダルのうちに恋は終わる。

IV マルグリットの恋愛書簡の特徴

マルグリットがシャンヴァロンに宛てた18通の恋文は、前述のように日付、発信地が記されておらず、またシャンヴァロンからの返信は僅か2通しか残っていない。一般に恋文は相手にだけ理解されればよいものであり、むしろ他人に事情を隠すために互いにしか分らぬように書くことさえありうるだろう。こうしたことに鑑みれば、二人の恋愛の推移は容易に測り難いが、ヴィエノの時間的位置づけに従って、丁寧に書簡を読めば、おおよその展開として、上記のようなものが得られるだろう。

しかしマルグリットの恋愛書簡は、恋の進展やマルグリットの恋の特徴の証拠としてのみ価値を有するものではない。16世紀の女性が残したこの貴重な恋文はさらに大きな価値を持っている。

文学性

その価値の一つは、教養があり、文人を集めたサロンを開いてもいたこの女性が書く文の文

学性である。その点を、バニエール＝ド＝ビゴールに不妊治療に追いやられた時期に書かれたと想定される、書簡115で詳しく見てみよう。

恋する者たちが自分たちの苦勞ゆえにアモルを非難したように自分もそうするところであったが、孤独な人里離れたところに引き離されたのは選ばれた者の仲間に入れられるためだと思ひ直す、と書き出した後、マルグリットは次のように続ける。

こうしてわたしはこの僻地に追い込まれて、そこでこの高山の幸運を羨みます。この山々は頂上が天にとても近いのです。気晴らしもなく、わたしは至高善を絶えず観想して、あるいは至福の時を待ちながら、暮らしています。これ以上適切な場所をわたしは定めることはできませんでした。わたしの美しい心よ、これほどの完全さが、あなたは何も知らないものがない神々しい存在であると決定的にわたしに思わせないなら、わたしが幾千もの場所にあなたの名前、あなたの美しさとわたしの情熱を刻んだ最も硬い岩が、わたしの魂が、時と不在が毎日百もの様々な形に変え、再び変える蠟の魂であるかを、あなたに証言することができるあなたに言いましょう。この洞窟の多い山のエコーはわたしの声とため息でなやまされるでしょう。美しいナルキッソス以外の原因があるなら。その原因ゆえにエコーはわたしに返事しますが、エコーに常につれなかったものをわたしが持っているのであまりに絶望して怒り狂ってであり、それほど長い間音を保ち、ざわめき轟くのを聞く雷鳴はなく、叫びを、住処の足下を過ぎる激しくそっとさせる急流の恐ろしい音に混ぜ、やがてわたしの滔滔たる涙で溢れさせるのではないかと心配です。嘆き以外の何も残っていない、この惨めな女の絶望は、わたしに何らかの慰めとして役立ち、幾分わたしの悲痛を和らげます。というのもわたしの感覚は、エコーの感覚同様、望む唯一の対象を奪われても、わたしのナルキッソスが決してわたしの魂の声に耳を貸さないことはなく、遅からず熱烈な悲嘆に答えるだろうということで、エコーに対して優位に立っているからです。わたしの美しい心よ、わたしはそう確信しますが、神よ、わたしは間違っているのでしょうか。わたしが誤っていると、死はわたしを欺かず、わたしを救うでしょう。それ故、(わたしたちが自分たちと同じであることを許さないために、多くの完全な人々に移り気という欠点を置きたい) 神々の妬みで、あなたが愛を変えるようになるときは、わたしを捨てたと考えてください。あなたがこう非難されうると、そしてわたしがこう絶望しうるとわたしは決して認めないでしょう。「死ぬまで愛した」と言ってください、そしてあなたの心変りはわたしの終わりだと確かに信じてください。わたしの終わりはあなたの意志の終わりだけでしょう。だからわたしの幸運、愛、人生を続けさせるか短くするか、どちらかにしてください。その糸はアトロポスの手にはありませんから。それはあなたの美しい手にあり、わたしはその手に千回も口づけします。¹⁰⁾

¹⁰⁾ Marguerite de Valois, *Correspondance 1569-1614*, Édition critique établie par Éliane Viennot, Honoré Champion, 1998, pp.174-175.

<<Ainsi suis-je réduite en ce désert, où j'envie l'heur de ces montagnes hautes, qui de leur ciel ont si proche la tête. Je vis, sans divertissement, en la continuelle contemplation de mon souverain bien, ou attendant l'heure de ma

恋人を「美しい心」と呼び、「観想」や「至高善」という語を使うところに、後に検討するネオプラトニズムの影響を見ることができるこの一節には、夫の酷い態度により、山奥に追いやられて¹¹⁾、孤独のうちに過ごしながら、遠くにいる恋人への思いに僅かに希望を託そうとする、嘆き悲しむ恋愛情念が満ち溢れている。こうした内容は韻文であれば、エレジーというジャンルとなり、トマ・セビエは『フランス詩法』でエレジーを「その本性からしてエレジーは悲しく哀れであるから。そして専ら恋愛の情念を扱い、あなたはその情念には嘆きや悲しみのないのをほとんど見聞きしたことはなかったのだから」¹²⁾としていた。またセビエは同箇所でもエレジーは10音節の平韻としている。ヴィエノは、マルグリットの恋愛書簡に無韻詩句の存在を認めているが¹³⁾、例えばこの一節での、<<Ainsi suis-je réduite en ce désert/, où j'envie l'heur de ces montagnes hautes/, qui de leur ciel ont si proche la tête. >>を、示したように区切れれば10音節の無韻詩句を見ることができよう。こうしてマルグリットはいわば散文でエレジーを書いていると言っても過言ではあるまい。

さらにデュ・ベレーは『フランス語の擁護と顕揚』において、エレジーに、オウィディウスなどの例に倣って、「神話を交える」ことを薦めている¹⁴⁾が、ここでマルグリットもそれを実

béatitude : lieu plus propre ne me pouvait être destiné. Si tant de perfections, mon beau cœur, ne me faisaient tenir pour résolu que vous êtes divin être à qui rien n'est inconnu, je vous dirais que les plus durs rochers, où en mille et mille lieux j'ai gravé votre nom, vos beautés et mes passions, vous pourraient témoigner si mon âme est de ces âmes de cire que le temps et l'absence changent et rechangeant tous les jours en cent divers formes. L'Echo de ces cavernes montagnes serait importunée de ma voix et de mes soupirs, si elle avait autre cause que son beau Narcisse, qui fait qu'elle me répond, mais avec telle rage désespérée de me voir posséder ce qui lui a toujours été cruel, qu'il n'y a tonnerre qui si longtemps garde son son, que l'on l'oit bruire et gronder, mêlant ses cris à l'horrible bruit d'un torrent impétueux et effrayable qui passe au pied de sa demeure, [et] que je crains faire bientôt déborder par l'abondance de mes larmes. Le désespoir de cette misérable, à qui rien n'est resté que les plains [plaintes], me sert de quelque consolation, modérant quelque peu mon ennui ; car si mes sens sont, comme les siens, privés du seul objet qu'ils désirent, mon âme a cet avantage sur elle que son Narcisse ne sera jamais sourd à sa voix, ni tardif à répondre à ses passionnées lamentations. Je me le persuade, mon beau cœur, mais, mon Dieu, n'ai-je pas raison ? Alors que je m'y tromperais, la mort ne me trompera pas, elle me sera secourable. Quand donc, par l'envie des dieux (qui, pour ne nous souffrir semblables à eux, voudraient sur tant de perfections mettre une tache d'inconstance), vous viendriez à changer d'amour, ne pensez pas m'avoir laissée. Je ne permettrai jamais que puissiez avoir ce reproche et moi ce déplaisir. Dites <<je l'ai aimée jusqu'à la mort>>, et croyez pour certain que l'heure de votre changement sera celle de ma fin, qui n'aura [pour] terme que votre volonté. Faites donc ou durer ou abrégé mon heur, mon amour et ma vie, car le fil n'en est aux mains d'Atropos : il est aux vôtres belles, que je baise un million de fois.>>

¹¹⁾ マルグリットの悲しみ憤りは、『回想録』で書いているように、夫アンリ・ド・ナヴァールがフォースを恋して妊娠させたということよりも、むしろこの侍女の不始末を処理するためにオー・シヨード温泉に連れて行くよう求められたのが原因であると思われる。Cf. Marguerite de Valois, *Mémoires et autres écrits 1574-1614*, Honoré Champion, 1999, pp.209-210.

¹²⁾ Thomas Sébillet, <Art poétique français>, II, 7, << Car de sa nature l'Élégie est triste et flébile: et traite singulièrement les passions amoureuses, lesquelles tu n'as pas guères vues ni ouïes vides de pleurs et de tristesse.>> in *Traité de poétique et de rhétorique de la Renaissance*, Le Livre de poche, ©1990, pp.128-129.

¹³⁾ Marguerite de Valois, *Correspondance 1569-1614*, Édition critique établie par Éliane Viennot, Honoré Champion, 1998, p.167, n.1.

¹⁴⁾ Joachim du Bellay, *La Deffence et Illustration de la Langue Françoise*, S.T.F.M., ©1979, II, 4, p.111-112, <<

行している。そもそもマルグリットは、恋愛書簡で、古代神話、聖書にしばしば言及していた¹⁵⁾。この一節でも、パルカの一人であり、生命の糸を切る女アトロポスと、ナルキッソスとエコーの神話を巧みに用いているが、後者の利用ではマルグリットの独創が発揮されている。

奥深い山中のパニエール＝ド＝ピゴール、急流のアドゥール川、夫の仕打ちに憤り、恋する人は遠く離れている、こうした現実状況が、ナルキッソスとエコーの神話の導入を動機付ける。オウィディウスの『変身譜』を通じて16世紀にも広く膾炙していたこの神話の、美少年であったが、言い寄る女性を撥ね付け、泉に写る己の姿に惚れこむが、それが自分だと分って泉に引き込まれて落命したナルキッソスに譬えられるのは、美男の評判の高いシャンヴァロンである¹⁶⁾。おしゃべりゆえにユーノーにこだまに変えられ、ナルキッソスの後を追ひ、死に行くナルキッソスの嘆き悲しむ声を繰り返すエコー。「わたし」は孤独な山中にいて、恋人の美しさと自分の情熱を固い岩に刻みながら、この悲しいわが身を嘆くが、それをエコーは繰り返さなくてはならないので悩むとするのである。さらにマルグリットはこのエコーの神話を発展させる。エコーは絶望して怒り狂ってこだまを返すだろうが、その響きはこの山中を流れる激流の音と交じり合い一層激しく轟き、ナルキッソスが流した涙で泉の水を濁らせた以上に、「わたし」の涙は滔滔たるものだから、流れを溢れさせるのではないか心配だ、と誇張法を用いて、悲しい気持ち嘆きを増幅して見せる。死んでしまったナルキッソスはエコーの繰り返す声に応える術はないが、「わたし」のナルキッソスは「わたし」の嘆きにやがて応えてくれるだろうと思うと続けたあと、死の主題に戻り、愛か死か、脅迫的な愛を要求して、アトロポスにつなげている。

ためいき、嘆きはこだまで反響し、雷鳴、瀬音と交じり合って増幅され響き渡り、聴覚イメージが強調され、声（聴覚）はナルキッソスの姿（視覚）に対抗し、つれないナルキッソスを圧倒するだろう。また水のイメージは、この神話から喚起されるナルキッソスを飲み込む泉の水から、ナルキッソスの流す涙で連想される定型的誇張表現のマルグリットの涙を経て、山中を流れる激流へとつながり、死の主題を伴いながら強化され、マルグリットの置かれている悲しみを噴出させる装置となる。

こうしてマルグリットは、神話を単に典拠として利用するのではなく、自らの創意を付加して発展させ、音調を整えた、いわば散文でのエレジーを作り出し、深い悲しみと恋人への激しい思いを見事に表現している。

Distile avecques un style coulant & non scabreux ces pitoyables elegies, à l'exemple d'un Ovide, d'un Tibule & d'un Properce y entremeslant quelquesfois de ces fables anciennes, non petit ornement de poésie.>>

¹⁵⁾ プロメテウスの苦しみ（書簡155）、テーレウスの行為（書簡158）、パエトーンの失敗（書簡163）、アグラウロスの嫉妬（書簡164）、セメレーの向こう見ずな願い（書簡167）、ソロモンの裁き（書簡170）、カストールの救助（書簡170）、アイネアスの遍歴（書簡173）、イカロスの墜落（書簡175）。

¹⁶⁾ フィチーノは『「饗宴」注解』第六話十七章で、ナルキッソスを、魂にとって肉体の美は自分の美の似姿に過ぎないのに、自分の外貌の美しさに溺れてしまい、自分の追い求めている対象と求めている対象が異なっていることに気づかず、渴望を満たすことができなかつた不幸なものとして描いており、マルグリットとシャンヴァロンの恋の行方を知れば、シャンヴァロンをナルキッソスに譬えるのは誠に皮肉なことであった。

ネオプラトニズムの影響

フェスチュジェールの研究書¹⁷⁾が示すように、1484年にフィチーノの刊行した『「饗宴」注解』に見られるネオプラトニズムの愛の教義は、15、16世紀のイタリア、16世紀のフランスの文学に大きな影響を与えた。ベンボの『アゾラーニ』(1505年刊)、エクイコラの『愛の本質』(1525年刊)、カスティリオーネの『宮廷人』(1528年刊)、エブレオの『愛の対話』(1535年刊)と、この教義をめぐる、あるいは発展させた著作が、イタリアで発表された。フランスにもこの波は間もなく及び、フィチーノ作品の部分訳がシャンピエの『徳高き貴婦人の船』(1503年刊)、コロゼの『愛の定義と完璧』(1542年刊)に見られた後、シルヴィウスによる全訳が1545年に刊行され、またベンボの作品はジャン・マルタンにより1545年に、カスティリオーネの作品はジャック・コランにより1537年に、エブレオの作品はドゥニ・ソヴァージュとポンチュス・ド・ティヤールによって1551年に仏訳上梓された。

こうした翻訳に基づいて、16世紀前半のフランス文学では、マルグリット・ド・ナヴァールの諸作品、アントワヌ・エロエの『完璧な女友』(1542年刊)、モーリス・セーヴの『デリー』(1544年刊)、ジル・コロゼの『夜鶯物語』(1547刊)を初めとして、ネオプラトニズムの愛の教義に影響を受けた作品が次々と書かれた。

このネオプラトニズムの愛の教義の流行は1578年以降再び起こり、フィチーノ自身による『「饗宴」注解』のトスカナ語訳が同年ル・フェーヴル・ド・ラ・ボドリーにより新たに仏訳出版されたのを皮切りに、ガブリエル・シャピユイはカスティリオーネの作品の新訳を1580年に上梓したのに続いてエクイコラ作品の仏訳を1584年に世に送り、またティヤールによるエブレオの仏訳も1577年以降四度新版が刊行された。こうした流行に対して、モンテーニュはエブレオの作品の1549年刊のヴェネツィア版を所有していたが、『エッセー』第三巻第五章でこの観念的な恋愛談義を批判するほどであった¹⁸⁾。

マルグリット・ド・ヴァロワがこのネオプラトニズムの愛の教義の影響を受けているのは、多くの研究者の指摘するところであり、また書簡の中での「観想」<contemplation>(書簡115、書簡162、書簡172)、「至高善」<souverain bien>(書簡115、書簡171)、「共感」<sympathie>(書簡161)、「神々しい狂気」<divine fureur>(書簡163)、「偉大なダイモン」<grand démon>(書簡164)、といった語の使用や、「プラトンの意見」<l'opinion de Platon>(書簡163)という言葉及によっても十分確認できる。

ヴィエノが書簡集の注で特に強調しているのは、マリエジョルがマルグリットが著作を所有

¹⁷⁾ A. -J. Festugière, *La philosophie de l'amour de Marsile Ficin*, J. Vrin, 1941.

¹⁸⁾ << Les sciences traitent les choses trop finement, d'une mode artificielle, et differente à la commune naturelle. Mon page fait l'amour, et l'entend : lisez luy Leon Hebreu, et Ficin : on parle de luy, de ses pensées, et de ses actions, et si n'y entend rien. Je ne recognois chez Aristote, la plus part de mes mouvemens ordinaires. On les a couverts et revestus d'une autre robbe, pour l'usage de l'eschole. Dieu leur doit bien faire : si j'estois du mestier, je ne naturaliserois l'art, autant comme ils artialisent la nature. Laissons là Bembo et Equicola.>>Montaigne, *Les Essais*, Gallimard, <Pléiade>, ©2007, p.917.

していたという¹⁹⁾エブレオの影響である。例えば書簡163の以下の一節と『愛の対話』との関連を指摘する。

でもお願いですから、あなたは、それを信じるのをあまり喜ばず、わたしの完璧さはわたしの愛の完璧さにあると考えて、これほど心地よい告白でわたしがそれを受け取ると確信してください。わたしはそのためにプラトンの意見に賛成であるわけではありません。プラトンは愛する者は、神々しい狂気に満たされて、愛する者よりも優れていると主張しています。²⁰⁾

確かにこの一節はヴィエノの挙げる『愛の対話』でのソフィアの言葉²¹⁾とよく対応している。

しかし、マルグリットがネオプラトニズムの愛の教説に関して、1578年にギー・ル・フェーヴル・ド・ラ・ボドリーがイタリア語からフランス語に翻訳したフィチーノの『饗宴』注解を読んでいなかったとは、まず考えられない。何しろこの書はバルサモの言うように²²⁾、マルグリットの恋愛書簡の発想源であり、この版はマルグリットに献呈され、ル・フェーヴル・ド・ラ・ボドリーは「マルグリット・ド・ヴァロワには／愛の真実がある」²³⁾とアナグラムを使って称賛しているのであるから。

例えば、マルグリットが最もまとまって愛の教説を展開している、書簡171の箇所を見よう。

<< Il est bein certain, mon beau cœur, que l'amour est sophiste et plein de persuasion, puisqu'il vous fournit tant de raisons que, presque, il mettrait la vérité en doute. Je ne suis toutefois résolue de me rendre, estimant plus de gloire de vaincre où il y plus de résistance. Je sais que vous direz ce que vous avez [déjà] bien pu dire, l'ayant appris de moi : qu'il est aisé de braver l'ennemi absent. Et certes, je l'avoue, et que votre présence pourra toujours en moi ce qui serait à tout autre impossible. Mais ce qui m'assure et me donne hardiesse, c'est que je sais soutenir votre même opinion. Car la raison étant semblable en toutes personnes, elle y ordonne pareille loi, ou, si elle n'est obéie, ce n'est en ceux qui

¹⁹⁾ Mariéjol, *op.cit.*, p.322.

²⁰⁾ <<Mais soyez, je vous supplie, assuré que vous n'avez [pas] tant de plaisir à le croire que j'en reçois en une si agréable confession, estimant ma perfection consister en celle de mon amour. Non que je sois pour cela de l'opinion de Platon, qui tient l'Amant, comme rempli d'une divine fureur, plus excellent que l'Aimé.>> Marguerite de Valois, *Correspondance*, p.234.

²¹⁾ <<Sophie: Il me souvient qu'il dit en son liure du Simpose, que l'amant est plus diuin que l'aimé: pour ce que l'amant est ravi de fureur diuine, en aimant.>> Leon l'Hebreu, *Philosophie d'amour de M. Leon Hebreu, trad. d'italian en françois par Seigenur du Parc*, (traduction de Denis Sauvage), Claude Micard, 1580, pp.480-481. ヴィエノは1595年のブノワ・リゴー刊行版から引用しているが、私たちは1580年クロード・ミカール刊行版を参照した。Cf. レオーネ・エブレオ、『愛の対話』、本田誠二訳、平凡社、1993年、273頁。

²²⁾ Jean Balsamo, << Marguerite de Valois et la philosophie de son temps >>, in *Marguerite de France reine de Navarre et son temps*, Centre Matteo Bandello d'Agent, 1994, p.274.

²³⁾ << En MARGVRITE DE VALOIS /GISE LA VERITE D'AMOVR >> *Discours de l'honneste amour sur le Banquet de Platon, par Marsile Ficin*, Traduits de Toscan en François par Guy Le Fevre de La Boderie, Paris, Jean Macé, 1578, Sig. a iv v.

vous ressemblent, qui, bien réglés, s'y conforment toujours. Votre âme veut ce que je veux, et, lui complaisant, c'est vous complaire. Car l'âme est seule l'homme, qui étant liée avec le corps, ces deux sens lui suffisent, la vue et l'ouïe, pour contenter son désir qui, tout différent des appétits du corps, se sent son plaisir d'autant retranché que l'on s'adhère aux autres – qui ne peuvent être causés d'amour, puisqu'ils ne sont désir de beauté (car l'amour n'est autre chose), et la beauté ne peut être désirée et aimée que par ce qui la connaît. Il n'y en a que deux sortes : de l'âme et du corps. Celle de l'âme consiste en la correspondance de plusieurs vertus, et celle du corps en celle de plusieurs lignes et couleurs. La première ne se comprend que par l'âme aidée de l'ouïe, et la seconde par les yeux, n'y ayant autre partie en nous qui en puisse juger. Et est l'objet des autres appétits si éloigné de la beauté qu'il s'y peut dire du tout contraire, car troublant et mettant presque l'entendement hors de son propre lieu, il bannit par son intempérance toute correspondance, et par conséquent toute beauté.

Jugez la différence de ces mouvements pour n'abuser plus, par les termes, de choses si dissemblables. Et connaissez que, soit que vous soyez ou philosophe ou amoureux, il faut que vous condescendiez à ma raison, qui trouve si parfaitement ne vous le vrai sujet du vrai amour, qu'il m'astreint à parfaitement et éternellement vous aimer. Ainsi, remplie de cette divine et non vulgaire passion, je rends en imagination mille baisers à votre belle bouche, qui seule sera participante au plaisir réservé à l'âme, le méritant pour être l'instrument de tant de belles et dignes louanges où bientôt me puissé-je ravir.

Le désir que vous avez eu de voir des œuvres d'un ignorant m'a apporté l'importunité de sa vue, que je ne lui ai pu refuser, pour ne l'avoir pour l'ennemi. Et puisque votre curiosité en est cause, il est bien raisonnable que vous ayez votre part de cette fâcherie par cette seconde [lettre] que je vous envoie, où il se persuade ce que je ne lui accorderai, si ce n'est pénitence qui me soit par vous ordonnée. Adieu, mon tout, ma vie et mon souverain bien.>>²⁴⁾ (強調は論者)

²⁴⁾ pp.245-247. 「わたしの美しい心よ、確かに恋は屁理屈屋で、説得に富んでいます。あなたにたくさん理屈を提供し、ほとんど真実を疑いにしてしまうでしょうから。しかしながらわたしは降伏する決心はしません。より多くの抵抗があるところで打ち勝つ栄光をより高く考えますので。わたしから学んであなたが言うことのできたことを言うだろうことは分かっています。敵がないときに立向かうのは容易です。そして確かに、認めますが、あなたの存在は他の人にはできないであろうことをいつもわたしにできるでしょう。しかしわたしが確信し、わたしに大胆さを与えるものは、わたしがあなたの同じ意見を主張できることです。というのも理性はどんな人でも同じで、同じ規則を命じ、あるいは従われるなら、よく規則化され、いつも従うのは、あなたに似た人々においてではないのですから。あなたの魂はわたしの欲することを欲していて、その魂が満足すれば、あなたは満足です。というのも魂だけが人間で、身体と結び付けられ、渴望を満足させるのに、視覚と聴覚のこの二つの感覚だけで十分で、渴望は身体の欲望とは全く異なり、人は他の喜びに従うだけに切り離された喜びを感じ、美の渴望（愛はそれ以外のものではありません）ではないので、他の喜びは愛の原因ではありません。そして美は美を知ることによってのみ渴望され愛されるのです。美には二種類しかありません。魂の美と身体の美です。魂の美はいくつもの徳の調和にあり、そして身体の美はいくつもの線と色の調和にあります。前者は聴覚に助けられた魂によってだけ理解され、後者は、それを判断できるわたしたちの部分がないので、目によって理解されます。そして他の欲望の対象は美から遠く離れているので、反対のことが言われます。というのも知性を混乱させ、本来の場所以外にほとんど置くので、節度がなく、調和全体を追い払い、従って美全体を追い払うからです。

この箇所をル・フェーヴル・ド・ラ・ボドリーによるフィチーノの作品の仏訳の以下の部分と比較してみれば、その影響は明瞭である。

<<Or quand nous disons Amour, entendez le desir de Beauté : parce que telle est à l'endroit de tous les philosophes la diffinition d'Amour, et la Beauté est vne certaine Grace, laquelle principalement et le plus souvent naist de la correspondance de plusieurs choses. Laquelle correspondance est de trois sortes. Parce que la Grace, qui est és ames, est par sa correspondance de plusieurs vertus. Celle qui est és corps naist par la concorde de plusieurs couleurs et lignes. Il y a encor vne fort grande grace és sons par la consonance de plusieurs voix. Donques la Beauté est de trois manieres, c'est à dire, des ames, des corps, et des voix. Celle de l'Ame se cognoist seulement avecques l'entendement : Celle des corps avec les yeux. Celle des voix ne se comprend point avec autre chose qu'avec les oreilles. Consideré donques que l'entendement et la veuë, et l'ouye sont les choses avecques lesquelles seules nous pouuons ioüyr d'icelle Beauté : et que l'Amour est desir de iouir de la Beauté : l'Amour tousiours est content de la pensee, des yeux, et des oreilles. Or que luy est-il besoing de flairer, de gouster, ou de toucher, attendu que tels sens ne sont autre chose qu'odeurs, saueurs, chauld et froid, mol et dur, ou semblables choses? Donques aucune de ces choses, puis qu'elles sont simples formes, n'est la beauté humaine. Mesmement consideré que la Beauté du corps humain requiert vne concorde de members diuers, et l'Amour regarde la iouissance de la Beauté, comme son but et fin. Ceste seulement appartient à la Pensee, à la veuë, et à l'ouye. Donques l'amour se borne et termine en ces trois choses. Et l'appetit qui suit les autres sens, non Amour, mais plustost se nomme desir libidineux, ou rage. En outre si l'Amour enuers l'homme desire la beauté humaine, et la beauté du corps humain consiste en vne certaine correspondance, et la correspondance est vne certaine temperance : s'ensuit que l'Amour n'appete autre chose, sinon celles qui sont temperees, modestes, et honorables. Si que les plaisirs du goust et du touchement qui sont volupté, c'est à dire, plaisirs tant vehemens et furieux, qu'ils chassent l'entendement de son propre estat et repos, et pertroublent l'homme, tant s'en fault que l'Amour les

言葉により、これほど異なっているものを、もう濫用しないために、これらの動きの違いを判断しなさい。あなたが哲学者であろうと、恋するものでであろうと、わたしの理屈に同意しなければならないことを知りなさい。わたしの理屈はあなたに本当の愛の本当の主体を完全に見出し、完全に永遠にあなたを愛することをわたしに余儀なくさせるのです。こうして、神々しく俗ではない情熱に満たされて、わたしは想像であなたの美しい口に千もの口づけを返し、それだけが魂に取っておかれる喜びに与るものでしょうし、やがてわたしが恍惚とすることのできる多くの美しく価値ある称賛の道具となるに値するのです。

知らない人の作品をあなたが見たいと思うので、わたしはこの人に会うのが迷惑となりました。敵にしたくないので、拒むことができなかつたのです。そしてあなたの好奇心がその原因なのですから、あなたに送るこの第二の手紙で、この不愉快をあなたも分け持ってくださいるのが正当です。あなたによりわたしに命令された改悛でないとしても、わたしがその人に与えないことを確信します。さようなら、わたしのすべて、わたしの命、わたしの至高善よ。」

desire, que plustost il les a eu abomination : et les fuit, comme choses qui par leur intemperance sont contraires à la Beauté. La rage Venerienne, c'est à sçavoir, la luxure, tire les hommes à l'intemperance et, et par consequent à la non-correspondance. Ce qui par semblable semble tirer à la deformité, c'est à dire, à laideur et deshonesteté, et amour à la Beauté. La deformité et la beauté sont contraires. Doncques ces mouuemens qui nous rauissent à la deformité, et à la beauté, apparoissent aussi estre entre eux contraires. A ceste cause l'appetit de l'embrassement et l'Amour, non seulement ne sont pas mesmes mouuemens : mais aussi se desmonstrent estre contraires.>>²⁶¹⁾ (強調は論者)

フェスチュジエールは『饗宴注解』における愛の教義の三つの基本を、美の渴望としての愛、美と善の一致、人間の美と愛から神の美と愛への進展（一者＝神からの流出による美と愛の階梯と、神に回帰するための音楽、秘儀、預言、愛の四つの狂気）としている²⁶¹⁾。恋愛書簡の上記引用部分で展開されるのは、このうち「美の渴望」<désir de beauté>としての愛という教義である。マルグリットは「人間とは魂だけ」²⁷¹⁾と『『饗宴』注解』第四話第三章でのフィチーノの言葉を導入した後、美の理論を続ける。魂と身体（物体）の二種類の美は調和であり、魂の美は「いくつもの徳の調和」<la correspondance de plusieurs vertus>, 身体の美は「いくつもの線と色の調和」<celle de plusieurs lignes et couleurs>とする。そしてこれらの美に関わる感覚は理性、視覚、聴覚であるから、他の感覚によるものは、「節度がない」<intempérance>故に調和とは相容れず、美ではありえず、本当の愛でないとする。マルグリットの説くこの愛の教説がフィチーノ説のほぼ引き写しであることは容易に見て取れようし、それがル・フェーヴル・ド・ラ・ボドリーの翻訳を通してであることも、上にフランス語で引いた用語の一致によって明白である。

ここで興味深いのは、シャステルの言う「斉美」*concinitas* の美学²⁸¹⁾を展開するにあたっての、美と感覚の関係である。フィチーノでは、魂、物体、音楽の三種の美があり、それぞれに理性、視覚、聴覚が対応していた。ところがマルグリットにおいては、魂と身体の二種の美しかなく、身体の美は視覚に関係するが、魂の美は「聴覚に助けられた魂」<l'âme aidée de l'ouïe>によって理解されるとなっている。これはマルグリットの独自の美学の表明なのであろうか。この三要素の関係は実はフィチーノ自身においてもそれほど明確ではない。『『饗宴』注

²⁶¹⁾ *Discours de l'honneste amour sur le Banquet de Platon, par Marsile Ficin*, Traduits de Toscan en François par Guy Le Fevre de La Boderie, Paris, Jean Macé, 1578, pp.23-27. 紙幅の関係で日本語訳を挙げないが、ラテン語からの翻訳（マルシーリオ・フィチーノ、『恋の形而上学』、左近司祥子訳、国文社、1985、30-32頁）を参照されたい。

²⁶²⁾ *Op.cit.*, p.127.

²⁷¹⁾ <<l'ame est l'homme>>. *Discours de l'honneste amour sur le Banquet de Platon, par Marsile Ficin*, Traduits de Toscan en François par Guy Le Fevre de La Boderie, Paris, Jean Macé, 1578, p.107. なおこの言葉のラテン語原文は<<homo solus est animus>>(*Commentaire sur Le Banquet de Platon: De l'Amour*, Texte établi, traduit, présenté et annoté par Pierre Laurens, Les Belles Lettres, 2002, p.71)であり、マルグリットの訳がより正確である。

²⁸¹⁾ André Chastel, *Marsile Ficin et l'art*, Droz, 1954,p.98. Cf. アンドレ・シャステル、『ルネサンス精神の深層 フィチーノと芸術』、桂芳樹訳、平凡社、1989、166頁。

解』でも第五話第六章では、魂、身体、音の美が考察され、後二者は〈ordo〉「配列」、〈modus〉「比率」、〈speties〉「形色」が想定されていたが、同じ第五話でも第十八章で神的愛、人間的愛、野獸的愛の三段階について言及される時には、知性、視覚、触覚が対応させられ、聴覚は現れない。シャステルの言うところでは、当時の音楽理論、天球の音楽の理論を受けてフィチーノ自身が1490年の『エネアデス注解』では、「靈魂の美は聴覚の調和的美のイメージによるかのように表される」²⁹⁾と述べるに至ったとのことであるから、マルグリットはこうした事情を踏まえて、上記の説にたどり着いたのであろうか。

こうした音楽、聴覚の捉え方は、マルグリット自身の音楽趣味、音楽好きが影響している可能性もあろう。マリエジョル³⁰⁾やガリソン³¹⁾の言うように、マルグリットは自分専属の音楽家を幾人も抱え、フィチーノの『「饗宴」注解』に影響されて『隠者の対話その一』で詩と音楽の結合をはかるティヤールも属する「宮廷アカデミー」の一員でもあったのだ³²⁾。ともかくマルグリットをも含めた16世紀後半の音楽、聴覚の美に関してはさらなる調査が必要であろう。

フェスチジェールの挙げたネオプラトニズムの愛の教説の三つの基本のうち、マルグリットが十分に論を展開しているのは、美の渴望としての愛という、いわば定義的な部分だけであり、神の愛の発する源としての太陽、光に関しては、シャンヴァロンを「わたしの美しい太陽」〈mon beau soleil〉(書簡161、書簡167)、「わたしの魂の唯一の太陽」〈seul soleil de mon âme〉(書簡175)などと呼び、また「最高善」や「狂気」も言葉としては用いるが、まとまって説明することはなく、美と善の一致や愛の階梯について十分な理解があったのかは不明である。むしろネオプラトニズムの愛の理論は、王妃たる身でありながら恋をし、しかも愛人の地上的欲求に身を委ねることを避けねばならぬ必要から、恋愛の崇高化をはかったものと理解されるべきであろう。

しかしこの試みは成功したとは言い難い。先に述べたように、1583年春にはマルグリットの妊娠の噂が出ている。ドービニエに一般には帰せられる『諷刺的離婚』³³⁾やモレリ³⁴⁾はシャンヴァロンとの間に子どもを生んだと述べるが、アンリ三世同様私たちにも決定的な証拠はない。この点で興味深い資料を提示するのはガリソンである。ガリソンはマルグリットの世帯の会計簿で、この時期に大きなヴェルチュルガダンを作るための大きな出費と、侍女、医者への多額の贈り物が記載されていることを指摘し、マルグリットは太り、侍女たちを買収する必要があったことを推定し、中絶あるいは秘密裏の出産を認めねばならないとしている。ことがこのように行われたのであるなら、シャンヴァロンへのネオプラトニズムの愛の理論の鼓吹に

²⁹⁾ *Ibid.*, p.99.<< celle [=la beauté] de l'âme [...] nous est rapportée [...] comme par l'image dans la beauté harmonique de l'ouïe>>. Cf 邦訳, 169頁。

³⁰⁾ *Op.cit.*, p.154. ネラックの宮廷で、お抱え音楽家は、リュート奏者二人、ミュゼット奏者一人、三人の他の演奏家、ヴァイオリン奏者六人と聖歌隊員、としている。

³¹⁾ *Op.cit.*, p.71. ミュゼット、リュート、ヴァイオリンの三人の音楽家としている。

³²⁾ F・A・イエイツ、『十六世紀フランスのアカデミー』、高田勇訳、平凡社、1996年、57頁。

³³⁾ Agrippa d'Aubigné, *Œuvres complètes*, A. Lemerre, 1877, T.2, pp.662-663.

³⁴⁾ *Op.cit.*, p.38.

も拘わらず、マルグリットは恋愛においても、理想を貫けず挫折したということになるうか。

V. おわりに

兄アンリ三世にパリを追われてシャンヴァロンとの恋を悲劇的に終えた後、マルグリットは夫アンリ・ド・ナヴァールからも受け入れられず、南仏をさ迷い、やがてユソンに長く幽閉状態となる。マルグリットはその後も何人もの情人を持ち、情人が他の情人を殺害するという痴情沙汰を二度も引き起こし³⁵⁾、今日までつながる「マルゴ神話」の種を提供した。シャンヴァロンとの関係はマルグリットにとって最後の恋愛であったかのかも知れない。マルグリットの残した18通の恋愛書簡はこの恋の軌跡を垣間見せてくれるものである同時に、その文学性、ネオプラトニズムの影響をはっきりと示す証言としても、この上なく貴重なものであり続ける。

³⁵⁾ 1586年7月 ユソンでリュニラックが薬種商の息子を殺害 (Garrisson, *op.cit.*, p.243)。1606年4月5日 パリでヴェルモン夫人の息子がサン＝ジュリアンを殺害 (Mariéjol, *op.cit.*, p.338; Garrisson, *op.cit.*, pp.309-310)。

Lire les lettres amoureuses de Marguerite de Valois

Yoshihiro KAJI

Célèbre pour les aventures amoureuses, Marguerite de Valois a pourtant caché, dans ses *Mémoires*, les relations sentimentales avec ses amants tels qu'Entrague et Bussy. Heureusement il nous reste ses lettres amoureuses adressées à Jacques de Harlay, seigneur de Champvallon, objet de son amour entre 1580 et 1583.

Les témoignages par d'Aubigné, L'Estoile et Busbec, et la datation et la disposition des lettres selon E. Viennot nous permettent de suivre le parcours de cet amour : commencement dans la situation misérable causée par Henri de Navarre, crise provoquée par l'affaire de mariage de son serviteur, époque stable de l'union des deux amoureux, où la reine s'efforce d'inculquer à Chamvallon la doctrine de l'amour, et catastrophe scandaleuse avec le départ de Marguerite de Paris.

La lecture de la correspondance entre la reine de Navarre et son chevalier nous révèle la valeur littéraire de ses œuvres épistolaires et l'influence de l'idée néoplatonicienne de l'amour sur ses actes, par laquelle elle voulait ennoblir sa passion amoureuse, en vain.